

No. 97【2014年2月28日配信】

青森市民とスキー (担当:竹森)

こんにちは、囑託員の竹森です。今回は、青森市のスキーにまつわるお話をしたいと思います。

現在、青森公立大学国際芸術センター青森 (ACAC) では青森の「雪にまつわる道具」をテーマにした企画展「中崎透×青森市所蔵作品展 シュプールを追いかけて」が開催されています。アーティストの中崎透さんの監修のもと、大正期～現在のものまで100組以上のスキー、藁靴わらぐつやそり橇など市民の冬の暮らしを偲ばせる道具が展示され、特にスキーは、木の1枚板だった単板スキーから合板スキーへとといった変遷を追うことが出来る貴重な展示です。

さて、ここで展示されているスキーの中には、白鳥 (スワン) のマーク、また雪の結晶のマークがついたスキーがいくつか見られます。これらは、どちらも「青森スキー製作所」で作られたスキーです。青森スキー製作所は、市内浦町橋本に大正12年(1923)、大町で書店(大観堂)を営む鈴木大観らが発起人となって設立されました。前年の大正11年に県教育会主催の青森県初のスキー講習会が新城村で開催され、青森県スキー連盟とその青森支部が結成されるなど、この時期は市民のスキー熱もだんだんと高まってきた頃です。



白鳥(スワン)のマーク  
(青森市森林博物館展示資料と『青森スキー製作所70年小史』を参考に筆者作画)

青森スキー製作所製のスキー(大正期)  
(青森市森林博物館展示資料を参考に筆者作画)



昭和初期の新城スキー場  
(青森市役所発行『青森名所案内』より)

青森スキー製作所製の「スワン」ブランドのスキーは、スキーを奨励していた青森営林局や青森市スキー連盟をはじめ、市内のスキー愛好家に親しまれました。

青森スキー製作所は、戦時中軍需工場となり、スキーのほか軍事用品を製造することとなりますが、戦後、昭和30年代には「SNOW・FLAKE」(雪の結晶)のマークでスキーの海外輸出を開始しました。同社は現在も「株式会社ブルーモリス」としてスキー器具の製造・販売を行っており、各地のスキーヤーに広く親しまれています。



青森スキー製作所の広告  
(市史編さん室所蔵「市町村合併記念新観光地ハイキングコース絵図」より)

青森という豪雪地域ならではのスポーツであるスキーは、製造工場の誕生でより一層市民に広がり、身近なものとなりました。

冒頭で紹介いたしました企画展「シュプールを追いかけて」は3月16日まで開催されますので、雪と向き合い親しんできた青森の人々の軌跡を、皆様も追いかけてみませんか。

※今回のトリビアは『青森スキー製作所70年小史』(株式会社青森スキー製作所 1994年)、『青森県総覧』(東奥日報社 1928年)を参考にしています。